

博士学位論文概要

湖南説唱本研究

岩田和子

本論文は、清末民初の湖南省各地で特異な出版ブームを築いた湖南説唱本が、説唱文芸史においてどのような役割を担っていたのかについて、物語の伝承、説唱本の流通という側面から研究したものである。

湖南説唱本については、姚他（1929）『湖南唱本提要』や、張継光（1998）「一百五十種湖南唱本書録」によって、地域文化を知る上で大変貴重な資料だと紹介され、また謝玉芳（2008）が中山大学人類学部収蔵の湖南説唱本を整理し提要をつけたが、それ以外、文芸研究で取り上げられることは皆無であった。

現在、湖南説唱本は、姚他（1929）、張（1998）、謝（2008）による著録以外に、テキストが国内外の所蔵機関に分散して保管されている。論者による調査から、中国北京市の国家図書館、首都図書館、上海市の上海図書館、復旦大学、杭州市の浙江図書館、湖南省長沙市の湖南図書館、広東省広州市の中山大学非物質中国遺産研究中心、日本の早稲田大学図書館、早稲田大学演劇博物館、大木康氏私蔵など、全部でおよそ 355 種 590 冊にのぼる作品が現存することが確認された（上記以外の所蔵機関は未調査である）。

これらのテキストに対する収集、整理作業を通じて、湖南説唱本は、①大量に集中して残されていること、②ひとつのジャンルだけでなく、弾詞、鼓詞など北方、南方の複数の説唱が入り混じって流通していること、③地域独自の物語および全国的に流布した物語の地域独自の発展や変化が見られること、などという特徴が見出すことができる。また、「口承文芸（上演）と文字テキスト（出版）」、「全国性と地域性」といった、清代以降の説唱文芸の発展に関わる様々な要素が湖南説唱本には内包されていることが分かり、湖南という地域性から説唱本を考察することは、非常に意義があると判断した。

上述のとおり、湖南説唱本に関する先行研究は殆ど皆無であるが、これまで湖南地域の伝統芸能と演劇に関する研究は単独で行われており、他地域の説唱文芸、例えば北方の鼓詞、子弟書、江南の弾詞、広東の木魚書などでも、それぞれ目録整理研究、出版活動に関する研究、個別の物語の伝承に関する研究などが独立して行われて来た。本研究は、それらの独立した研究を「湖南説唱本」という着眼点から新たに展開させたことに独創性と意義がある。

本論では、物語の伝承とテキストの出版・流通を基軸に、①清末民初の説唱文芸活動全体における湖南説唱本の位置、②清末民初、特に太平天国以降の湖南という、極めて限定的な時間と地域で起きた文化現象、③清末民初の出版界の趨勢——木刻説唱本から上海石印説唱本へ——を背景に、湖南の特異な文化現象が地域の枠組みを越えるとどのように変遷するのかを中心に、湖南説唱本の役割を解明した。

研究方法として、現存する湖南説唱本の 355 種ある諸作品のうち、伝統的な戯曲や小説、有名民間故事に取材するもの、或いは説唱文芸で新たに創作された、読み物として流通し

た約 120 種の作品の中から、「湖南の地域的独自性」と「流行性」を基準に、代表モデルとなるものを抽出し、それぞれその他の説唱だけでなく、小説、戯曲、地方劇、民間故事など、各種媒体における関連故事の収集と、それらについて地域文化と出版文化という観点から分析を行った。

まず、本論の第 1 章では、現存する湖南説唱本の概容をまとめ、湖南説唱本とは如何なるものかを示し、第 2 章から第 5 章において、物語の伝承、流通における湖南説唱本の果たした役割を具体的に明らかにした。各章における考察から得られた研究成果は以下のとおり。

第 1 章 現存する湖南説唱本の概容

本章では、湖南説唱本とはどのようなものであるか、現存するテキストを調査し、出版年代、印刷形態、テキストの形態、封面の特徴、出版地と書肆の分布、収録される物語内容の傾向をまとめた。

湖南説唱本の出版年代は、刊記から同治あたりから光緒年間、民国 20 年前後の清末民初と推定される。印刷形態は木版印刷が主である。テキストの説唱形態は、弾詞、鼓詞、評話など、複数の説唱ジャンルが入り混じり、また山歌、小調なども存在して複雑であるが、本章では、張（1998）による分類法に則り、各種テキストの実際の書影を付して再現的に整理した。

封面の形式は、各書肆ともにほぼ共通しており、封面には書名だけでなく、副題、出版地、書肆名、印刷数が記される。ほぼ同じ封面の説唱本でも、印刷数だけ異なるものや、出版地、書肆名が削られている或いは変更されているもの等も多数現存するため、当時の湖南では版木を各地の書肆で使い回していたと考えられる。また、現存する湖南説唱本、および姚（1929）、張（1998）等に記される書誌情報に対する調査を通して、岳陽、常德、桃源、益陽、長沙、寧郷、中湘、辰州、宝慶、洪江、武岡、永州の湖南省全域に 85 におよぶ書肆があったことが確認できた。物語の傾向は、恋愛物、家庭問題などの世話物や、事件解決の公案物は特に種類が多く、シリーズ化のような現象も見られ、特に人気があった。

第 2 章 「秦雪梅」故事の伝播と流通

本章では、全幕通しの湖南説唱本『秦雪梅三元記全部』（「秦雪梅」故事）が、湖南各地の書肆から盛んに出版されて流通しただけでなく、他地域でも広く類似の説唱テキスト（説唱本『秦雪梅三元記』系列）が出版されたことに着目し、清代以降の「秦雪梅」故事の流布において、湖南説唱本が重要な位置を占めると推定した。

そのことを解明するために、「秦雪梅」故事が取材する明の南戲伝奇『商輅三元記』、および各種媒体におけるテキストの収集、整理を通して、物語の形成と展開を詳らかにした結果、明代に南方から発祥した「秦雪梅」故事は、弋陽腔系演劇の上演と散齣集の出版を以て南中国を中心に流布したが、清代以降、民間説唱が隆盛すると、物語の伝承系統は大きな転換期を迎え、弋陽腔系演劇で伝わった古い層の内容を基盤に、新しい内容の「秦雪梅」故事が圧倒的な勢いで全国に広まったことが明らかとなった（説唱文芸や地方劇の中にも弋陽腔系演劇の古い層の内容を継いだものもある）。

また、湖南説唱本『秦雪梅三元記』の中で描かれる「秦雪梅による地獄めぐり」の場面は、説唱で新たに付加されたものであり、そこに出現する「三世姻縁」——商霖と秦雪梅

は、実は天界の金童と玉女が下凡したもので、一世が梁山伯と祝英台、二世が郭華と王月英に転生したが、結ばれない男女の姻縁を全うするために、三世は商琳と秦雪梅に転生した——という設定も、湖南説唱本独自のものであった。湖南地域では全幕通しの説唱本の他に、折子戯やダイジェスト版の「秦雪梅」故事も編まれて独自の流行を築いており、新しい層の「秦雪梅」故事の他地域への発信と流通に、湖南説唱本は大きな影響力を持っていたと言えるだろう。

第3章 湖南説唱本と多世姻縁の物語

本章では、前章で取り上げた湖南説唱本『秦雪梅三元記』の中に出現する、「三世姻縁」（「転生姻縁」）の設定をてがかりに、主に有名民間故事の中に特徴的にあらわれる湖南独自の「三世姻縁」の現象が、物語の流布、テキストの流通、光緒年以降に隆盛した上海石印説唱本の出版活動などを背景に、どのような形で全国的なものとなっていくのか、その様相を明らかにした。

「三世姻縁」の要素——物語の冒頭或いは結末で、「（主人公の）何某は、実は天界の金童玉女の生まれ変わりで、今世で姻縁を全うできなかったので、次の世は何某に転生する」、「第一世は何某と何某、第二世は何某と何某…」と語られ、主人公の男女が現世で結ばれず、他の有名民間故事の主人公に転生する——は、「秦雪梅」故事だけでなく、その他の有名民間故事でも、同様に説唱本として編まれる際に新たに付加されるようになり、例えば、湖南説唱本では、『秦雪梅三元記全部』（「秦雪梅」故事）、『王月英賣胭脂』（「売胭脂」故事）、『新抄繡像祝英台』（「梁祝」故事）の三種の物語の間で、主人公が転生する設定が流布した。一方、上海石印説唱本では、北方の鼓詞で流行した「転生姻縁」の組み合わせを採用し、『新出抄本買胭脂』（「売胭脂」故事）、『最新絵図梁山伯祝英台夫婦攻書還魂團圓記』等（「梁祝」故事）、『絵圖水漫藍橋相會』（「藍橋会」故事）、『続新藍橋』（「続藍橋会」故事）の物語の間で、主人公の男女が転生する設定が流布した。いずれも、「転生姻縁」の手法を用いて、湖南、北方、上海などの地域で独自の文化現象が築かれていったと言える。

また、これらの民間故事の説唱本は、それぞれ単独で出版されたものだったが、近代になると、「転生姻縁」を媒介として、七種の民間故事をひとつに寄り合わせ、新たに一つの「多世姻縁」の物語として、『七世夫妻』という小説も出版された。この「転生姻縁」の物語の長編化の背景には、例えば、湖南説唱本『秦雪梅三元記全部』、『王月英賣胭脂』、『新抄繡像祝英台』のテキストの末尾に、「続きは〇〇をご覧ください」というシリーズ化を狙った宣伝文句を挿入し、「転生姻縁三部作」として出版したり、上海石印説唱本では転生姻縁の要素がある物語同士を半ば強引に合本販売したりと、清末民初の湖南や上海の書肆による意図的な販売戦略が少なからず影響していたことも明らかにした。

第4章 湖南説唱本「私訪」故事の流行と流通

本章では、清末民初の湖南省ほぼ全域の書肆から陸続と出版され、一大ブームを築いたという「私訪」故事を取り上げる。他地域の民間説唱にはみられない、湖南で単独に流行した特異な文化現象を生み出す要因について、説唱本の出版形態や手法と物語の中身、つまり形式面と内容面の二つの側面から考察した。

「私訪」故事とは、公案劇や公案小説などに必ず盛り込まれるお馴染みの要素——包拯など清廉な官吏が変装微行して事件を解決する——をメインに創作された物語である。

まず、形式面から言うと、湖南の書肆は、説唱本として「私訪」故事を出版する際、「主人公である各大人が、その功績により皇帝から中国全土を隈なく巡閲するようを命じられ（一十八省把兵巡）、上皇劍（殺生与奪の専権を有す「尚方宝劍」）、先斬後奏（切り捨て御免の特権）および三千の人馬を賜り、各地に民情調査へ向かう」という決まったフォーマットに基づいて創作を行い、また封面を統一し、パターン化された「私訪」故事を大量に出版した。このような商品規格の確立が、「私訪」故事の流行を生み出す一つの要因となったと言える。

内容面について言えば、物語にしばしば湖南人が登場したり、他地域と比較して湖南地域の優位性が語られたりと、現実と虚構を「私訪」を介して融合させながら湖南化を図り、湖南の人々の共感、支持を得るための工夫がなされた。特に、物語の主人公に呉達善、陶澍、彭玉麟という、湖南に縁のある実在の人物を据えたことも大きい。陶澍と彭玉麟は、実際に皇帝の命を受けて各省の巡閲を行い、悪を取り締まった、湖南の出身者であった。中でも彭玉麟は、湘軍水師として太平天国軍と交戦し、洪秀全が占拠した南京の陥落にも功績のある地元の英雄であり、太平天国の乱後、彼が湖南を拠点に長江沿いの各省を巡閲した活動時期が、湖南における説唱文芸活動の隆盛する時期と重なり合ったことも、「私訪」故事の人気、流行を支える要因となったと言える。

一方、上海石印説唱本が隆盛すると、翻印された物語の多くは各地の独自の地域性を排除したものが多かったため、湖南色の強い湖南説唱本「私訪」故事は、演劇としては湖南に限定的に存続し続けたが、読み物としては次第に淘汰されて行った。「私訪」故事の流行という、清末民初の湖南地域で単独に起きた特殊な文化現象の解明を通して、全国的な説唱文芸活動の展開において、太平天国の乱はひとつの契機をもたらし、また湖南という地は、その文化モデルをみるうえでも非常に重要な地域として存在していたことが明らかとなった。

第5章 湖南説唱本「美図」故事の流行と流通

本章では、第4章の「私訪」故事が、パターン化により物語を大量生産し、また内容を湖南化することで湖南地域において特異な流行を築いた、という現象と非常に似通った動きをする湖南説唱本「美図」故事を取り上げた。説唱本の形式面と内容面の二つの側面から、湖南で独自の流行を築いた要因および光緒年以降の上海石印説唱本の隆盛を背景にどのような展開をみせたのかについて考察を試みた。

この物語は、「ある男主人公が、紆余曲折の流浪の中で、縁あって出会った女性たちと次々に婚姻を結び、最終的に出世をして一夫多妻の大団円を迎える」というフォーマットに基づいて創作され、男性が婚姻を結ぶ女性の数が三人なら『三美図』、五人なら『五美図』と「美図」の前の数字を変えて陸続と出版された。テキストの現存数や物語の種類などから鑑みて、湖南では「私訪」故事と人気を二分して流行したと思われる。

ただし、「私訪」故事と異なるのが、「美図」故事の流行は、湖南地域のみで単独に起きた現象ではなく、既に江南の弾詞でも同じ出版手法を用いて流行していたことである。つまり、弾詞「美図」故事の商品規格が湖南に持ち込まれ、その後、新たに湖南独自の流行が築かれたのである。

湖南説唱本『三美図』、『四美図』、『五美図』、『後五美図』、『七美図』、『八美図』、『九美図』、『十美図』のうち、特に流行したと考えられる『五美図』、『後五美図』、『七美図』は、

互いに本編（『五美图』）、続編（『後五美图』）、番外編（『七美图』）というシリーズ関係であること、また封面も統一した形式を用いたことなど、湖南の書肆は、江南の弾詞「美图」故事とは異なる、湖南独自の商品規格を新たに作り出した。また、物語内容を積極的に湖南化し、湖南の人々の支持を得る仕掛けを施したり、更には湖南で人気を博した「私訪」故事の要素を「美图」故事の中に融合させたりすることで、内容面と形式面から独自化を図った。

一方で、湖南説唱本では販売戦略の一環であった「美图」故事のシリーズ化や、流行を築くために必須だった湖南化は、上海石印説唱本の隆盛と全国的な流通においては、湖南説唱本「私訪」故事と同様に不必要な要素とされた。ただし、湖南説唱本でも『後五美图』と『七美图』のように、物語中に「私訪」故事の要素がある作品だけは、「美图」という文言を書名から排除し、『新刻私訪桂城何伸抄家青龍傳全本』、『何伸抄家』、『嘉慶私訪桂花城』、『清官私訪烏江渡』、『新抄小清官私訪烏江渡全本』など名称で、上海石印説唱本として生き残っていったことが明らかとなった。

古来、湖南地域が、人口の流動、芸能の流入、経済活動の拠点として存在し、地理的、文化的意義のある位置を占めていたことは勿論、太平天国の乱における江南地域での湘軍の活躍と、彼らが故郷の湖南にもたらした空前絶後の繁栄は、説唱文芸活動の隆盛と展開にとって大きな契機となった。

清末民初の説唱文芸活動において、湖南は単に物流の通過点として存在したのではなく、独自の地域文化を構築する場でもあり、物語の全国的な発信や流布、説唱テキストの他地域への流通を支える一大拠点でもあった。特に江南地域とは説唱本の流通形態において密接な関わりを持ち、江南で流行した物語は流通経路に乗ってしばしば湖南へ運ばれた。しかし、湖南に伝わった江南の物語は現地に留まり根付いたのではなく、出版形態や手法はそのままに、物語の中身は湖南独自の強い地域的意識をもって新たに創作し直された。つまり、物語を湖南化することで現地に深く浸透させ、地元のものとして新たな流行を築いていったのである。

また、時代は下り、光緒年以降の上海における石印出版の隆盛に随い、各地の木刻説唱本は上海へ集められて翻印されるようになるという出版界の趨勢の中で、湖南説唱本の物語も幾つか翻印されたが、上海石印説唱本においても同様に、出版手法は湖南説唱本と共有しながら、湖南色の強い内容は淘汰され、中身は上海独自の創作が行われるという文化現象が起きていた。説唱本の流通過程において、その出版形態や手法が文学自体よりも先に伝わり、物語の中身を変容させることで対応していたのである。

このような出版・流通と物語の中身との間に見られる文化現象の入り混じりは、一見すると矛盾したものだが、それぞれ同一の出版文化圏に存在しながら独自に築かれていった地域文化であり、地域の物語であった。湖南説唱本には、四大奇書『三国演義』に取材する『天水関』や『三哭桃園』などの物語も出版され、恐らく一定の人気はあったと推測されるが、現存数や印刷数は決して多く無く、大きな出版ブームにならなかったと思われる。その要因として、そこに湖南化できる要素が無かったからであろう。

以上、湖南説唱本の中から「湖南の地域的独自性」と「流行性」を基準に抽出した物語に対する研究を通して、清末民初の説唱文芸活動における地域商業モデルの一端も明らかにすることが出来た。